

# 4章5節 新聞を読み質問力を磨く

大村昌代

## 4章5節1 教材の位置づけとねらい

社会の出来事に疑問を持ち、疑問を言語化し、他者にわかるように表現する。そのプロセスで視野を広げ、知識を深め、問いを何度も磨く。問いづくりを通して明らかにしたことをもとに、他者と議論して、さらに新たな視野と知識の共有と探求を続ける。

今回は特に問いづくりを中心に報告する。担当した授業ではICEでの授業デザインはしていない。ICEを意識して使用したのは、学生に思考を深めるように問いかけるときのみであることをお断りしておく。

Keyword：疑問、言語化、質問づくり、思考、ICEを意識した問いかけ

### 1 授業の中でどんな課題を感じていたか

質問が大事だとわかっていても学生はなかなか質問しない（限られた環境では質問する）。問い、学ぶために大学に来ていることを頭ではわかっている。しかし、いざ質問となると躊躇してしまう。そういう場面を様々な場所で見してきた。

学生との対話の中で、質問がない状態が良いことであり、人に対して質問したり質問されたりすることをネガティブに捉えていることも実際にあった。問い、学ぶことの体験はまだまだ足りないのかもしれない。

大学生になったからには、用意された問いを言われた通り解くという姿勢ではなく、教え込みでもなく、学問すること（問い学ぶ）が必然的に求められているはずである。学生の様子的一端から見ると、大学全体でもまだまだ問い学べる授業デザインが不足しているのかもしれない。たとえ用意されたテーマでも、興味や関心、疑問点を切り口として、本当に知りたいことを自分からつかみ取って学ぶような授業デザインができているだろうか。授業内でも教員が問い学ぶ環境を省察しながら整える課題がある。帝京大学八王子キャンパスで開講された「質問力を磨く I」（2019年半期）の授業内容の一部を取り上げる。授業構想者と複数で担当し、授業シラバスに則って授業を実施した。授業では教員（筆者）が学生との対話の中でICEを意識した問いかけをした。上記で述べた課題の解決の一助となるのではないかとということで報告する。

## 2 課題を解決するためにどんなツールや教材、指導をしたか

質問する姿勢だけではなく、実は質問が考えられないということも少なくない。質問づくりは授業中、授業時間外にできるだけたくさん行うことを指導している。質問づくり<sup>1</sup>には3つの要素で取り組む。

### ①新聞記事を読む

多くの学生は就職を前提にして大学で学んでいる。それにもかかわらず、「社会」の出来事に無関心で、新聞をあまり読んだことがないという学生は少なくない。記事を読むにしても、字面を追いかけるのではなく、問いながら読むことが必要となる。記事にあったキーワードを拾いつなげて、考えの可視化をコンセプトマップで表す。

### ②自分以外の誰かの立場に立つ

社会で起きている出来事は、はたして自分に本当に無関係なことなのかどうか。自分のことや周囲の親しい人たちのことだけではなく、自分に直接つながりのない他の人であったらどのようなことを考えるかなどを問い、思考を広げる。

### ③自分以外の誰かの立場で記事を読み、問いを作る

問いから何が明らかになり、問いを通して何を主張（表現）できるか。相手にわかってもらえるように伝えるには、どのように工夫したらよいかにも留意し、表現（口頭発表、文章化）する。ペアワークや発表時に示された問いについては、質疑応答を行う。質問する方も応答する方も、知りたいことの確認だけではなく、知識や考えが深まるように尋ねるよう指導していく。そこから学生どうして学び合っ

1 質問づくりは全体の授業デザインの一部である。質問づくりはQFTを元にして授業構想者の松本美奈氏（一般社団法人Qラボ代表）がアレンジした「新聞でQ」で行った。現在、松本氏は新しい構想で質問力の授業を複数の大学で展開しており、授業見学等も実施している（2020年5月現在）。

## 3 どんな場面で使うことができるか

授業で質問力が培われたとどのような場面で感じたか、日々の雑談等の中で学生から聞いてきたことを、大まかにミックスしてお伝えする。

- 新聞記事や他の授業や日常生活でも、読んで問うことに慣れてくると、授業や物事の理解が進む。
- ニュースがすんなりと耳に入ってくるようになった。
- 家族とニュースの内容について話せるようになり、授業の課題についても意見を交わすようになった。
- 他の授業でレポート等を書くときに、明らかにしたいことを伝わりやすく表現しているか、気にして書けるようになった。
- グループワークは大変だが他のメンバーが考えていたことを聞いて、自分との違いや見落としに気づけた。深く考える方法を得た。
- 質問をたくさん作ってこんなに考えたことがなかったので、難しくとても大変だった。受験勉強以来、最も頭を使った。

#### 4 使い方のコツは

- ①浅い問いを深めようと問いかけると、学生は問いの見直し、語の見直し、意味の問い直しを始める。その様子はCに向かうためにIを再定義しはじめているように見えた。つまり、Cを促すとICE全体の歯車が回り出す。
- ②問いづくりにおいては、深い問いが生まれるように促している。授業時に質問が出れば、その質問を共有しながら「みんなの問い」に変えて全体で考える。
- ③学生は問いづくりに悩みはじめると、問いづくりが目的化しはじめる。問いの先に何があるのか、問うことで何がわかるのか、問いを通して自分が表現したいことを伝えるように、視点の切り替えを促した。

## 4章5節2 教材の試行

---

### 1 何の授業で使ったか？

問いを作り、その問いを通して明らかにしたことをもとに、他者に文や口頭でわかりやすく伝える。

### 2 どんな場面で使ったか？

#### 問いづくり

A 1つの記事について、キーワードをつないでコンセプトマップを作り、そのつながりから10以上の問いを作る。

→ 個人ワーク

B 1つの記事についてグループで問いを作り、3つの質問に絞って口頭発表。

→ グループワーク

### 3 どのように使ったか？

毎週の課題として課した。

A 個人ワークで問いを作り、授業ではペアになった相手に自分の作った問いについて、わかりやすく伝える。

B グループに分かれて授業外で質問をまとめる。授業では3分でグループ発表する。発表後、質疑応答によってそれぞれの問いに対する疑問点や主張したいことをクラス全員で共有する。疑問点を注意深く探って質問し、その点を丁寧に説明する。答えを出す、ということではなく、一緒に疑問から考えを深めていこうとする場になった。

### 4 実際に使ってみてどうだったか？

個人ワークで作る問いは、グループワークで作った問いよりもなかなか問いが深められない。一人で行うときには、視点を変えられなかったり、表現や問いの種類が偏りがちになる。

グループワークでは、それぞれの班員の思考を収束することに苦労していた。しかし、個人では出てこない班員のアイデアに出会うことができた。グループワークでは質問力を補い合って、なんとか形(文や発表)にした。発想や着眼点の違いに刺激を受けながら、オリジナルの興味深い問いになるように磨いていたようである。学生どうしの対話には「同じ記事を扱っても、自分たちは気づかなかった。こういう問いになるんだ!」と驚きや好奇心、敬意もお互いに生まれていたようだった。

### 5 学生の変化や今後の課題は？

最初は個人間でも、グループのメンバー間でも問いはバラバラであった。授業回が進むにつれ、問いに時間軸、空間軸を取り入れたり、帰納的にまとめたり、ストーリー性をつけるなど、伝わりやすさに工夫をすることを、間違いながら、何度もつまづきながら身につけていった。

考えても考えても問いがわからない、伝わらないもどかしさは毎時間あるように見えた。どうして履修した(やめない)かを学生に尋ねたことがあった。何とか問いを作れるようになりたい、苦手を克服したいという学生が多かった。「あ! 少しわかったかもしれない」というハッとする気づきや「少し

でも克服してきている」と行動の変容を学びの意義だとしていたかもしれない。

磨かれた問いをもとに、お互いの着眼点や主張を認め合ったり、違いに驚いたり、考え方の工夫を教え合っていた。学び方を学んで、より深い問い、より深い思考へと進んでいった。

課題は、問う力、問いを磨く力を自分自身でつけられるかである。個人ワークでは顕著であったように、自分で自分の問いをどう見るか、評価する力は弱い。この点については指導に課題が残った。

## さいごに

◎授業はICE モデルを使った構想ではないが、対話の中でICE を使ったり、授業の振り返りのときにICE を使った。授業デザイン全体にICE の活用はできなかったが、問いかけるときの指標になった。ICE モデルの開発者である Sue Young とのメールのやりとりによると、授業ではI、C、E と言葉では言わないが、多くの教員は頭の中において授業に臨んでいる、ということだった。

◎ICE に相当する問いの判断（評価）を学生が自らできるツールがあれば、学生が自らの力で気づき、思考を深めるための判断力をつけられたかもしれない。

◎自己判断ツールとして、浅い→深い（ICE）に当てはめた CanBeMap を使用して、自分の問いの癖や深められていないところを、視覚でも深さを見ることができないか思案している。CanBeMap は試作段階であるが、資料として9章に添付する。